

2021 年全豪オープン短評 (1)

大坂なおみ対ムグルーザ戦

今年のテニス全豪オープンの大坂は非常に良い状態で開幕を迎えている。少し丸みを帯びた体型になったが、フィットネスは完全に仕上がっている。グランドスラム大会の難関である 4 回戦 (ベスト 16) で、大阪はムグルーザと対戦した。全仏 (2016 年) とウィンブルドン (2017 年) の優勝経験をもつムグルーザだが、タイトル獲得の後はやや低迷が続いている。安定した成績が残せていない原因の一つが、ストロークの安定性と勝負弱さである。昨年は全豪決勝まで行き、3 つ目のタイトルを狙ったが、ヘニンに敗れた。今年の全豪に向けて、ムグルーザは十分な準備を進めてきた。前哨戦から調子が良く、全豪でも 4 回戦まで危なげなく進んできた。そこで大坂の初対戦が実現した。

第 1 セット

第 1 セットは大坂のサーブがブレイクされて、4-6 でムグルーザ。獲得ポイントは大阪の 25 ポイントに対して、ムグルーザは 28 ポイント。ファーストサーブの平均速度は大阪が 173km/h、ムグルーザは 159km/h。セカンドサーブのそれは、大阪が 132km/h、ムグルーザは 134km だった。

ムグルーザのサーブの速度は遅いが、プレースメントが非常によく、大阪にサーブへの攻撃を許さなかった。大阪の速いストロークにも打ち負けず、逆にストロークエースを取る場面が何度もあった。3 回戦までの対戦相手なら返球できないストロークを何度も切り返され、大阪はストロークのアンフォーストエラー (unforced errors) を重ねたことが、第 1 セットを失った原因である。

大阪が 14 本のエラーを記録したのに対し、ムグルーザは 6 本に抑えた。もっとも、ウィナー (winner、ストロークエース) は大阪が 13 本に対し、ムグルーザは 5 本だから、エラーエースの数を比較 (相殺) すると、ストローク戦はほぼ互角だったと言えるが、それは統計上のことで、実際の感覚ではムグルーザがストローク戦を制しているという状態だった。

大阪がゲーム序盤で早々とムグルーザのサーブをブレイクして 2-1 とし、次のサーブゲームで 3-1 とするはずだったが、このサーブゲームを取り切れなかったことが、第 1 セットの行方を不確実にしてしまった。

第 2 セット

第 2 セットもほぼ互角の戦いだった。サーブエースの数 (エースとダブルフォールトを相殺した数)、ウィナーとアンフォーストエラーの数 (相殺数) を比較しても、まった

く同数である。このセットのトータルポイントは大坂の 27 ポイントにたいし、ムグルーザの 26 ポイントとほぼ同じである。

双方とも 1 ブレークダウンで迎えた大坂 5-4 の終盤。ムグルーザはサーヴィスゲームを落とし、このセットを失った。この結末はややあっけなかった。ムグルーザの勝負所での気弱さと、勝機を逸しない大坂の動物的感覚が、このセットを決めた。

第 3 セット

ムグルーザがこの試合で大阪と互角の戦いを展開した要因はストロークの安定性とファーストサーヴィスの高い確率である。ムグルーザのファーストサーヴィスの確率は試合を通して 79% ときわめて高かった。大坂のそれは 61% である。これだけサーヴィスが好調だと、相手のサーヴィスを破るのが難しい。第 3 セットも 80% の確率でファーストサーヴィスを決めてきた。

大坂のワン・サーヴィスダウンで迎えたムグルーザ 5-3 からの大坂のサーヴィスゲーム。大坂は 15-40 のダブルマッチポイントを相手に与えてしまった。それまでの流れを考えると、大坂の逆襲は難しい。大坂の連戦連勝はここで終わりと思った瞬間から、試合が逆転しだした。

第 3 セットのスタッツを見ると、トータルポイントは大坂 41 ポイントに対し、ムグルーザの 36 ポイントだったが、それは結果データである。ダブルマッチポイント迎えた時点で、大坂はムグルーザに比べて、7 ポイントも差を付けられていた。絶体絶命の状態だったことが分かる。ところが、そこから信じられないような逆襲が始まった。

マッチポインを迎えた大坂は 4 ポイントを連取してこのゲームを取りゲームカウントを 4-5 にし、ムグルーザのサーヴィスゲームを迎えた。マッチポイントを取り切れなかった落胆はあるが、ムグルーザが自分の力でこのゲームを取り切れればゲームセットである。

しかし、ここでムグルーザにプレッシャーがかかった。ここで勝負弱さが出た。ムグルーザはこのゲームを取り切ることができず、ゲームカウントは 5-5 のタイになってしまった。こうなると、ゲームの流れが大きく変わる。続く大坂のサーヴィスゲームでは大阪が簡単にとり、試合終盤になってゲームの優劣が逆転した。大坂 6-5 からのムグルーザのサーヴィスゲームで、ムグルーザは 1 本もとることができず、大坂の前に屈してしまった。

ムグルーザがダブルマッチポイントを迎えた試合終盤からゲームセットまで、15 分間に 22 ポイントのラリーがあったが、そこで大坂が獲得した 17 ポイントに対し、ムグルーザのそれは 5 ポイントである。まさに終盤で怒涛のような大坂の攻撃があったことが分かる。

観戦中は大坂がどうやって勝ったのか不思議だったが、終盤のスタッツは大坂の勝負強さと動物的攻撃感覚を際立たせている。なんとも凄まじい試合だった。

準々決勝 (5 回戦) の相手は謝淑薇 (シェイ・スーウェイ) である。プロの選手の中に、

一人だけ「球を返すのがうまいアマチュアのおばさん」がいるという感じの選手である。ボールをラケットに当てるだけで、サーブスピードもファースト、セカンドともに 120km/h の選手である。彼女の怖さを知らない若い選手は皆、謝選手の術中に嵌ってしまう。簡単に打ち負かすことができそうなのだが、どんな球でもラケットを振るというより、当てる感覚でフラットに返球してくる。それも相手の嫌なところへ。まるで、素人のテニスを見ているような感覚になるのだが、若い選手が軒並み負かされる。誰にとっても、嫌な対戦相手である。プロ野球でいえば、大坂やウィリアムズが 150km/h 豪速球を投げる投手だとすれば、謝選手は 110-120km/h の球速でコーナーを突いてくる投手のようなものだ。打者にとって怖さはないが、振り切れない難しさがある。ウィリアムズに当たるよりは良いともいえるが、テニスの感覚を狂わされる恐れがある。こちらの方が怖い。

このような選手と対戦する場合、相手のペースに嵌らないように、パワーで圧倒する必要がある。ただ、それが雑なプレーを生むと、相手の思うつぼになるというのが、対謝淑薇戦の難しいところである。

さて、どうなるか。興味津々。